11. 学生の課外活動

1）ボランティア活動への支援

高知県立大学看護学部では、教員と学生が積極的に地域社会のボランティア活動に参加している。学生のボランティア活動を支援・促進し、人間や社会への関心を高め、さらに主体性の育成を支援するため、教員 2 名がボランティア委員として活動している。ボランティア委員は、ボランティアを募集する機関・団体と学内教員との橋渡しや、高知医療センターとの活動調整を行っている。

今年度は高知県小児糖尿病サマーキャンプが再開となり、ボランティアの募集やボランティア保険への加入の支援を行った。高知医療センターでのボランティア活動は今年度も COVID-19 の影響により実施されなかった。しかし、ボランティア活動再開に向けて車いすを使用する人への介助の仕方や視覚障がいをもつ人へのガイドの方法などを、学内のラーニングマネジメントシステム moodle を用いて学習する機会を設けた。以下、本年度のボランティア活動への支援について報告する。

(1) ボランティア活動に参加する前の学生への支援

① 学内ボランティアオリエンテーション

・看護学部が行っているボランティア活動について書面と moodle を用いて紹介した。ボランティア活動の紹介では、過去のボランティア活動の様子なども含まれており、活動内容がイメージできるように作成した。

② moodle を用いた学習支援

・資料として、ボランティア活動について、ボランティアガイダンス資料、車いすの移乗・移送に関する資料と動画、視覚障がい者の歩行介助に関する資料などを掲載した。

・車いすの実技演習や視覚障がいをもつ人へのガイドの演習については希望者に対して行うこととし、希望者は随時募集することとした。

③ ボランティア活動支援の評価

・moodle を用いた学習支援を行うことにより、学習者がいつでも自分の時間の中で学習することが可能となるよう環境を整えることはできた。しかし、学習者がシステムに登録することが前提であり、登録の呼びかけは何度も繰り返し行ったが、全員の登録には至らなかった。また、実技演習の申し出は学習者にゆだねられており、実際に実技演習を希望した者はいなかった。今後は学習者の主体性を高めるような働きかけが必要である。

(2) 高知医療センターでの活動

高知医療センターの病院ボランティア「ハーモニーこうち」への参加は、今年度も COVID-19 の影響により、ボランティア活動が中止となっている。次年度は段階的にボランティア活動を再開していくことが決定しており、学生が主体的にボランティア活動に参加できるように支援を継続する。

2）地域における活動

(1) 室戸ボランティアリーダー

2021 年より本学のサークル団体として登録された室戸ボランティアリーダーは、県内の「国立室戸青少年自然の家」や「高知県立青少年センター」にて教育事業に参加する子どもたちのキャン

プや自然体験のサポートを行っている。今年度も、リーダートレーニングの企画運営、レクリエーションや実際に行われる体験プログラムを学び、「子どもたちのためにどうすれば良いか」を考え、学生同士で相談し合いながらサークル活動に取り組んだ。新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行したことに伴い、学生同士の交流会、リーダー養成講座の企画や開催を例年通り年間 35 回実施した。また、小学 4～5 年生の参加者を対象としたボランティア活動は年間 17 回開催することができた。小学生を対象とした自主企画を夏に 4 泊 5 日、冬に 1 泊 2 日で計画した。自主企画ではオリジナルで考えた「遊び」を工夫し提供するなど、子どもたちが安心・安全に活動できるような地域での取り組みへの貢献をおこなった。

今後も、看護学部では、課外活動において報告や相談を受けながら、支援を継続していく。

(2) グローバルクラブ

令和 2 年に立志社中として活動を開始したグローバルクラブは、看護学部学生が「高知県に在住している外国人の方達がもつ課題を一緒に考え、安全で快適な高知での生活を支えるような取り組みをしたい」という目標を持って、活動を始めたものである。その活動によって、①外国の方が高知県在住の学生との相互理解を深め、ネットワークができる、②高知で外国の方が安心して暮らすことのできる環境づくりにつながる、③学生が外国の方との国際交流を通してグローバル力をつける、④将来的に、新たに外国の方が高知に来てくれるような呼び水になる、という効果を期待している。立志社中として活動開始直後より COVID-19 感染拡大により、地域での交流活動は困難となり、令和 4 年度以降はサークル活動になっている。

令和 5 年度も引き続き、学生は自主的に活動するために、自身の英語コミュニケーション能力向上のための看護英語勉強会を開催し、また、国際的な出来事への関心を持ちグローバルな視点を養うことにも努め、大学で主催したオンラインの大学学生との交流会に参加した。具体的には、①トロント大学のプログラムでカナダやロサンゼルスのホームレス問題について分析し、解決策を考えるワークショップ、②イタリアのカ・フォスカリ大学のプログラムで SDGs のゴールの 1 つである「すべての人に健康と福祉を」に関してグループで話し合い、各週 1 つのテーマを設定し（「国境なき医師団の活動」「マラリアの予防」「働く人々の健康」）、情報収集・共有して web 上で発表する活動に参加していた。

令和 6 年度は、高知県内に在住して働いている外国の方と交流する機会をつくり、活動していきたい。

3) 災害支援に関する活動：SIT

代表グループは 3 期目に入り、令和 5 年度も社会福祉学部の学生数名を含むメンバーで活動を続けた。主には 2 回生が中心になって講師を務め、前期前半に勉強会を開催した。医療トリアージ、CSCATTT、などの災害時医療に関する基礎知識を学びあっている。後半は大学祭でブースを開き、メンバー以外の学生や、将来本学の受験を考えてくれている高校生たちに対しても、災害時の備えや、知識の啓発を行った。

学年を重ねると、幹部メンバーの関心も変化し災害時医療救護だけでなく、避難所運営支援などにも関心が広がっているようである。その関心を、どのように今後の会の運営に結び付けるのか、次年度に向けて新たに模索して欲しいと考えている。

日本 DMAS（日本災害医学会学生部会）に所属していた 4 回生（初代 SIT 創始メンバー）は、令和 5 年、日本 DMAS の全国代表を務めていた。令和 6 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震に際しては、石川県庁内に設置された災害時医療対策本部に災害医療コーディネーターが着任し、DMAT の調整、被災地からの医療ニーズへの対応などが行われたが、その災害医療コーディネー

ターのサポートとして、日本 DMAS の学生たちを派遣する仕組みを構築したのは彼らである。本学からも、1 月中旬以降、2 期 3 名が支援活動を行った。

4）災害関連の活動：イケあい地域災害学生ボランティアセンター

2020 年からの新型コロナウイルス感染症の影響もあり、構成メンバーも 3 回生が不在となったため、代表は 1 学年飛ばして社会福祉学部 2 回生に移行し、看護学部 2 回生 3 名と新入生 4 名（看護 2 名、社会福祉・健康栄養学部、各 1 名）を主なメンバーとして活動を続けた。

地域社会は令和 5 年 5 月に新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行したことで、社会的には様々な行事が再開された。イケあいが参加できた行事としては、「未災地ツアー（本学学生主催）」「三里フェアの開催支援」「高知市社会福祉協議会主催災害ボランティアセンター運営研修への参加」「三里地区地域餅つき大会支援」などである。

未災地ツアーは、外部顧問の山﨑水紀夫氏の所に依頼のあった、大阪市立東淀中学校の修学旅行生 55 名、教員 5 名を対象に行った。「未災地ツアー」を知る先輩がいない中、山﨑顧問に講師をお願いし、数回にわたって「HUG」「三里地区の街歩き」などを予習し、本番に臨んだ。三里フェアも、4 年ぶりの学生参加ということで、来場する子供たち対象の「防災クイズ」の対応を全面的に任され、大学生の本領発揮で好評だったようである。その他、以前は独自に行っていた「ボラセン運営模擬訓練」も、自分たちでの主催は難しかったが、社会福祉協議会の研修会を体験することができた。12 月に行われる「三里地区地域餅つき大会」については、看護学部は 1 回生がふれあい看護実習、2 回生も新カリキュラムで 12 月中旬に看護実践能力開発実習 I が始まったため、他学部中心の有志参加にならざるを得ない状況となっている。

以上の活動が、更に令和 6 年度に繋がってくれることを祈るばかりである。